



マドリッド通信

第5回 ハイレベルミッションがUNWTO本部を訪問

マドリッドは、春の初めにはアーモンドの花が、そして、今は藤の花が街中に咲く。

3月30日からはサマータムが始まり、夜9時頃まで明るく風が心地よい季節「春のテラスシーズン」がやってきた。スペインで有名なバルもこの時期を境に、店先にテールを並べるテラス席を設置することから、スペインの人達はこの時期から夏の暑さが始まる前までを、そう呼ぶそうだ。

人々が明るい気持ちになるテラスシーズンの2015年4月。JATA田川博己会長の主導により、国土交通省の武藤浩審議官を団長に、JNTOの松山良一理事長、JATAの中村達朗理事長、日本観光振興協会の見並陽一理事長、JR東日本の清野智会長、日本航空の大西賢会長、全日空の岡田圭介常任顧問、JCBインターナショナルの三宮維光社長などで構成されるハイレベルミッションのUNWTO本部への訪問が実現した。総勢30人を超えるミッションによる本部への訪問は、日本が官民挙げて観光業に取り組んでいく姿勢として、UNWTOにも好印象を与えている。

やはり、日本を代表してUNWTOで一人働く日本人職員にとって、これ以上に素敵な瞬間はない。実務レベル・ハイレベル

のそれぞれで互いに知り合い、この会合を契機として、さらに日本とUNWTO、

あるいは、日本と国際観光の距離が近くことを強く確信すると同時に、日本の観光産業で働くものとして、日本のハイレベルミッションが国際観光の殿堂であるUNWTOを公式訪問した瞬間に立ち会えたことに純粋に感動した。これは、お迎えした国連職員一同、同じ気持ちだ。

以前、UNWTOから、日本による活動は、言葉や財政面での貢献はあるものの、実質的な部分が少ないという指摘を受けたこともある。今回の訪問でミッションの皆さんが見せた躍動感溢れる行動にふれ、人の心を動かすのは言葉や財政面の貢献以上に、「複数のVIPによる訪問」「人を派遣してリードしていく行動」などのアクションが極めて大切なのだと痛感した。

国連では英語のコミュニケーションが基本であることは言うまでもないが、一番大切なのは「伝える中身があるかどうか。お互いに求めているものがきっちり噛み合っていて話そうとする意志があるかどうか」なのだ。言葉は、それを伝える手段に過ぎないのである。

オリンピックを5年後に控えた2015年の今、日本として、国際観光に対してどの

熊田 順一 国連世界観光機関(UNWTO) 本部アジア・太平洋部門「コラボレーター」



UNWTO本部を訪れたハイレベルミッションの皆様

訪問は、その活動を開始する起点としても、非常に大きな歴史的意味を持つものだ。

今、声を上げ、行動を起こす時なのだ
と強く感じる。日本の美徳の一つと言われる「謙虚さ」は、アジアの中では「日本人は恥ずかしがり屋だから発言しない」とも捉えられている。言葉を越えたマンガやアニメというコミュニケーションツールを活用する手法もあるだろう。言葉の問題だけでなく、これまで国際的な観光産業の課題に対する関わり方が必ずしも十分ではなかったこともあり、国連における議論の文脈が日本国内の観光産業における課題として捉えられない状況は否定的でない。一方で、訪日旅行のお客様を送って頂くからには、相互に課題を共有しつつ、日本も各国の国際的な観光課題への支援を行っていくことが、何よりも重要なのは言うまでもない。

日本の観光産業や日本人が、世界の観光という舞台でどのように活躍していくべきなのか、どのような役割を担っていくべきか、日本だけでなく世界の観光産業に携わる人達の役に立てるのか。非常に青臭い議論かもしれないが、400年前にスペインを訪れた支倉常長よろしく将来における日本の観光産業のあるべき姿を思い描きつつ、世界やアジアで日本と日本人が観光分野で進んでいる点と勉強しなくてはいけない点を学びながら、将来の子供たちが笑顔でいられる社会の実現に少しでも役に立ちたいという思いが心の底から湧々と湧いてくる。